

井上 卓弥
東京学芸部



記者の

「よみがえる安達峰一郎」

つながる」信じる国際協調と
平和の実現に生涯をささげた
点にあると私は思う。

第一次大戦後の 秩序回復に貢献

先月、国際法学会の専門家たちを集めて東京で開かれたシンポジウム「よみがえる安達峰一郎」が、世界が称賛した国際人に学ぶ》に報告書「パネリストとして参加した。安達の生誕150年にならむ催したが、いかなる足跡を残した人物か即答できる日本人がないまま、どれだけいるだろうか。安達峰一郎(1869~1

934年は第一次大戦(1914~18年の惨劇を受けた発足した国際連盟の総会、理事会で日本代表や議長などの要職を担い、国際社会から絶大な信頼を得た外交官(駐仏大使など)だった。同時に、国際法学者として武力によるない紛争解決を目指す常設国際司法裁判所(PCIJ)の創設、発展に尽力し、30年には自ら判事に転身。翌年から3年間、アジア人初の所長を務めた。

しかし、肩書で安寧を理解できるわけではない。その真価は、大戦後の平和を希求する世界の潮流を現実のものとして真摯に受け止め、連盟の常任理事国となつた日本の立場を生かしつつ、眞の国益に

国際協調にささげた生涯



第9回国際連盟総会（1928年）の日本代表として主要国代表と会談する安達峰一郎・駐仏大使（中央）＝安達峰一郎記念財団提供

ついしかし、幣原（書畫郎）相や安達のような人々の誠意を疑うことはできない」と最大級の賛辞を獻じた。これが安達の國際的評価なのだ。

安達の情勢認識の正しさは、のちの歴史が証明していく。なのに、日本で十分に知られてこなかったことは、何を意味しているのだろうか。

安達は、歐米列強による領民地支配の実態や第一次大戦の修状を目の当たりにしていた。戦争違法化の歴史的意義を理解せず「英米の嗣權維持

議員が北方領土の返還を目的とした戦争の是非に言及するなど、2度目の世界大戦という、計り知れない代價を支払って手にした一戦争は違法、といふ常識であると急速に風化しつつある実態が浮かび上がる。いま、安達の足跡を真剣に学び直すことは、不安定さを増す国際社会の行方を見通すために、何よりも貴重な手がかりになるものと信じたい。

が誕生したが、帝国を失った。ドイツ系などの少数民族をめぐる民族対立も頻発した。安達は連闇理事会の場で粘り強く双方の当事者の説得、調停にあたり、欧州に利害を持たない公平な立場で秩序の回復と安定化に直接、貢献した。

また29年夏、巨額賠償金の返済に苦しむドイツの負担軽減策（ヤング案）が英仏対立で頓挫しかけた際にも、その外交手腕を駆使して忍耐強く和解へと導き、危機を収束させている。成果は日本の声望相次ぐ連闇脱落の翌34年末オランダで病没。同国の国は裏腹に、國際主義と國家主義の間に深刻な矛盾が生じ、は裏腹に、國際主義と國家主義の間に深刻な矛盾が生じ、抱え込み、時代に押し潰された悲劇の人でもあった。

安達が國際連盟で活躍し、たされたが、實際には「争連法化」の理念を初めて定めた不戦条約（28年）を

米國務長官をはじめ世界屈指の指導者と安達とが、連盟理事会や国際裁判の場、対等に渡り合い、互いに尊重し合う間柄だったことが分かる。大著「国際連盟史」を著した連盟事務局の英国人、ウォルターズも、歐州の第二次大戦勃発に先んじて戦争状態に入った日中関係について「一つの出来事（満州をめぐって始まった戦争）に光を当てる時、日本の自由主義は帝国主義者の意図を隠す仮面にすぎないと断じられる」と論じた。不平等条約の「戦争違法化」は、国際連合憲章や日本憲法に引き継がれた理念でもある。しかし、その事実を忘れては、国連ははじめ戦闘期の心ある外交官たちの忘却は、のちの大敗滅に至る重大な失敗の根本的な解明を、今日の日本がなれども怠っていることの証左ではないか。

の手段」「空虚な理想主義」つた。歴史の不幸は安達一きと一蹴した多くの日本人とは後、こうした後世の「常識」次元を異にしていた。

を「連れてきた帝国」日本が学ぶためには、さらなる大戦という過ちに直面踏み込むしかなかつたことだらう。

**自国第一に抗し
足跡に学ぶとき**